高層建築の意味（２００７・７・９）

現在、アラビア半島の都市ドバイの都心で「ドバイタワー」という高層建築の工事が進行している。建物の階数や規模は秘密にされているため、高さ八百㍍とも一千㍍とも憶測されているが、完成時点では、台湾にある現状で最高の「台北一〇一」の五〇九㍍を一気に凌駕して世界一位になることは確実である。

しかし、このような高層建築は、最近になり、世界各地で次々と建設されている。いくつかを紹介すると、すでに完成したものでは、マレーシアのクアラルンプールにある四五二㍍のペトロナスタワー、上海にある四二一㍍の上海金茂大厦など、建設途上のものでは、消滅したニューヨークのワールド・トレードセンターの跡地に実現する五四一㍍のフリーダムタワー、日本企業が上海に建設している四九二㍍の上海環球金融中心などがある。

次々と高層建築が建設される背景としては、そのような建物を可能にする技術が確立されてきたため、人口の集中により都市の土地不足を解決するため、一千億円にもなろうとする資金を調達できる経済能力が蓄積されてきたため、企業なり地域なり国家なりの威力を誇示するためなど様々な理由があるが、歴史を展望してみれば、権力というものを象徴する実体として構想されてきたことは明瞭である。

古代社会では、メソポタミアのジグラット、エジプトのピラミッド、中国の巨大墳墓、日本の古墳などが代表であるし、中世社会になると、各地の都市が競争でキリスト教会の伽藍を建設してきた。一二世紀にはフランスのシャルトル聖堂の高さ三八㍍、一三世紀にはフランスのボーヴェ聖堂の四八㍍、一四世紀にはイタリアのミラノ聖堂の一〇九㍍と上昇し、一九世紀に完成したドイツのケルン聖堂は一五七㍍に到達している。

古代においては王権という権力、中世においては教会という権力の誇示であるが、現代の権力といえば財力であり、それを象徴するのが各地の高層建築なのである。それを証明するために以下のような統計を提示したい。一九七五年までに建設された高層建築の順位は、一位のシアーズ・タワー、二位のエンパイア・ステート・ビルディングから十位のトランスアメリカ・ビルディングまで、すべてアメリカの都市に存在していた。

ところが、それ以後、二〇〇〇年までに建設された新規の高層建築は、一位のペトロナスタワーをはじめ、十位までのうち八本がアジア、六位のエミレーツタワー、十位のバージアルアラブが中近東に存在している。さらに二一世紀になると、前述のフリーダムタワー、オーストラリアのゴールドコーストに実現したＱ１タワー以外はアジアと中近東に集中しており、そして現在、ドバイタワーを凌駕する建物がサウジアラビアで計画されている。

高層建築の建設地点は見事なまでに財力の移動を表現しているが、これは長大架橋についても同様である。一九七五年まで長大架橋（吊橋）の十位まではアメリカとヨーロッパに集中していたが、二〇〇〇年までは日本に四本、中国に二本が十位以内に実現した。そして二一世紀になると、上位五位までが中国（十位も中国）で、アメリカに一本、ヨーロッパに二本、日本に一本というのが実態である。

古代エジプトではピラミッドの建設に従事した二十万人の人間の失業対策として、次々とピラミッドを建設してきたという学説がある。日本の長大架橋についても同様である。旧約聖書に警告されたバベルの高塔の事例を引用するまでもないが、財力や金力を象徴する高層建築を歴史の視点から理解する冷静さも必要である。